# 私のグランプリ改革案

# 艇言

報知新聞　藤原邦充

毒島誠のグランプリ（GP）初優勝で幕を閉じた昨年の住之江大会。毒島の強さや、グランデ5への王手（残りはオールスターだけ）など見所の多い大会だったが、記者はやはりルール面にばかり目が向いてしまう。無理だとは思いつつも、私のグランプリ改革案をつらつらと書いていきたい。

## やっぱりF罰則が厳しすぎる

3日目11Rのトライアル（TR）2nd初戦、菊地孝平のフライングは衝撃的だった。コンマ01の勇み足。このF罰則によって、菊地は今年の全SGの出場権を失ってしまった。もちろんGPも出場できない。マスターズ世代の46歳。この年代での1年の重たさは同年代だけに十分理解できる。もし優勝戦でFをすれば2年を棒に振る。アラフィフの選手なら引退を決断してもおかしくないほど重たいペナルティだ。

確かに売り上げを返還した住之江にとっては痛恨だろう。ただ、業界全体で考えれば、菊地孝平という「人気商品」が1年間以上もSGを走らないことの方が売り上げ減につながるのではないか。また、Fを切った菊地はTR2ndの2戦目、3戦目も自動的に6号艇となる。これも売り上げを下げる要因になっているのではないか。TRのFは賞典除外ではなく減点10。他の選手もFを切れば、優出できる可能性も残している。自動的に6号艇となることによって、そのレースは実質5艇立てとなり、売り上げは伸びないだろう。さらにTRを走るライバルにとっては菊地と同じレースになれば6号艇を回避できる。そう考えて走る選手がいてもおかしくない。F後の6号艇縛りは、他の選手にとっても不公平を巻き起こしてしまう。

## トライアルをもっと見たい

もう一つ印象的だったのがTR1stを突破できずGPシリーズ戦まわりとなった宮地元輝の表情だった。「もうエンジンも返すので帰らしてくれんかな」。冗談とも本気とも取れる言葉。初めてTR1st、2ndが採用された2014年の平和島大会では、1st敗退した今垣光太郎が節終了後、高熱で寝込んでしまった。TR1st敗退は、選手にとってもっともきつい敗戦と言えるだろう。

であれば、初日10～12レースでTRを3回すればいい。せっかく18人も出場するのだ。毎日TRを3個レース。1st、2ndの区別をなくし、18人でTRを毎日3個レース、初日から5日目まで計15個レース行うのだ。これなら、シリーズ組とTR組のエンジンが混ざることもなく、レースも買いやすい。なによりベスト6の6人のレースを初日から見ることができる。もちろんベスト6のエンジン抽選のアドバンテージは残す。枠番も初日TRの1、2号艇に6人が入る。

2日目以降は枠番抽選をするのか。否。記者は枠番抽選は運の要素が強すぎると考える。1人5回もTRを走れるのであれば、運の要素は排除すべきだ。2日目以降の枠番は前日レースの着順で決めればいい。同一着順であれば選考順位で決める。つまり、毎日が準優みたいなもの。翌日TRのいい枠番を取りたければ上位着順が必要になる。このルールなら、初日TRの1号艇に組まれる賞金ランク3位までが圧倒的に有利になる。初日TRを勝てば、2日目も1号艇が確定するからだ。もちろんライバルも対策を立ててくるだろう。前付けやチルトマックス、ピット離れ仕様など、様々な作戦で仕掛けてくる。初戦からTRらしいレースが期待できる。

TRでFを切った選手の6号艇縛りもなくす。Fを切ったとしても翌日のレースの着順さえよければ、1号艇の可能性もある。TRが5回あると考えれば減点10を挽回できる可能性もある。F後の選手が自動的に6号艇に入り、実質5艇立てのレースと、F後の選手が1号艇に入り、難解な6艇立てのレースなら、記者は後者の方が購買意欲をそそられる。もちろんFペナルティーは軽くして、賞金さえあれば来年のGPは出られるようにしてほしい。正式名称は賞金王決定戦であるのに、賞金が足りている選手が出場できないのは、どう考えてもおかしい。

**藤原邦充**（ふじわら くにみつ）
1974年生まれ　50歳
香川県観音寺市生まれ。近畿大学を卒業。就職浪人の末、98年に報知新聞入社。芸能社会、中央競馬、ボートレース（1年だけ）、一般スポーツ担当を経て05年から2度目のボートレース担当に。競輪担当になって観音寺競輪を取材することが夢だったが、無念の廃止に。